

- ① 《特集》 国際法・文化・若者の力で変える「反戦・平和」
- ⑫ 《実録・市民活動「私のいちばん長い日」》
`被災地における性暴力、をデマとする
記事が雑誌ジャーナリズム賞をとった日
正井 禮子（認定NPO法人女性と子ども支援センターウィメンズネット・
こうべ代表理事）
- ⑬ 《令和5年7月秋田豪雨災害 秋田発～現地から伝える「被災地の今」》
豪雨災害で景色が変わった町の
コミュニティづくりを支援
畠山 順子（NPO 法人あきたパートナーシップ 理事長）
- ⑭ 《V時評》
1.経済的な利益追求より民主主義の基盤整備を
2.2025年は国際協同組合年
—協同組合との実りある連携を目指して
- ⑮ 《NPOのためのほっこり法律相談》
NPOが公益信託の受託者に
—新法で広がる可能性
樽本 哲（弁護士、一般社団法人全国レガシーギフト協会 共同代表）
- ⑯ 《現場は語る～コーディネートの現場から》
だれもが参加できる
「リモート・ボランティア」
榎本 朝美（東京都社会福祉協議会 東京ボランティア・市民活動センター）
- ⑰ 《うおろ君の気にな～るゼミナール》
「デイジー図書」って？
- ⑱ 《U35のSocial Good》
ヴィーガン生活を支えるサービス
- ⑲ 《この人に》
桂 吉弥さん（落語家）
- ⑳ 《アゴラ／シネマ／ライブラリー》
仲町の家／『木靴の樹』／書籍紹介
- ㉑ 《晴れ時々ボランティア》
横山 風花さん（NPO法人志塾フリースクール岡山）



じぶんの町を良くするしくみ

赤い羽根共同募金

共同募金は、地域をつくる市民を応援していきます。

例えば……



地域で、子育てのお手伝いをしたり、
悩んでいるお母さん、お父さんの
相談にのる活動や、



障がいのある人が、まちで幸せに暮ら
せるお手伝いをする活動や、



地域で、1人暮らしや寝たきりの高齢者
に、栄養の整った食事を届ける活動や、



地域に住むみんなが「安心・安全」に
暮らすための活動や、

地域のいろいろな活動のために役立てられます。

- 中央共同募金会の全国共通助成テーマである「つながりをたやさない社会づくり～あなたは一人じゃない～」を助成テーマとし先進的などりくみを支援してまいります。また、地域福祉活動への『重点助成分野』を「誰をも受け入れ誰もが参加できる地域づくり」「健康でいきいきと暮らし続けられる地域づくり」「生きつらさを抱える子ども・若者とその家族への支援」「災害ボランティア活動・減災活動への支援」「生活に困難を抱える人々たちへの緊急支援」とし、これらの活動を重点的に支援してまいります。
- 国内で大きな災害が発生した時は、共同募金は都道府県域を超えて、被災地で被災した人々を助ける活動の支援も行います。
- 寄付金には、税の特典があります。会社など法人の寄付金は、全額損金算入できます。個人の寄付金は、所得税の所得控除または税額控除、住民税の税額控除の対象になります。



赤い羽根おおさか
www.akaihane-osaka.or.jp/
募金の使いみちはすべて、ホームページに掲載されています。

特集

国際法・文化・

若者の力で変える

「反戦・平和」

世界はウクライナ、パレスチナなどにおける戦争・紛争に加え、国や地域間の軍事的緊張も伝えられ、核兵器使用の可能性も高まる危機的な状況にある。背景には、人間や自然との共生や共存よりも、「人権」を軽視し社会の分断を肯定する利己的な価値観のほうが、権力者のみならず多くの民衆の心を支配していることを忘れてはならない。その中でも世界平和を希求する市民は、国際的な法の秩序、お互いを認め合う文化の大切さをどう訴えていけばいいのか。未来を生きる若い人の力を結集して、共存と人権を基調とする思想をどう醸成していくのか。日本各地の反戦平和運動の現場を訪れ、それに取り組む人々の姿を追った。

【特集チーム】 神野武美、永井美佳、牧口明、増田宏幸、村岡正司

戦後平和運動の概観

本特集をお読みいただくに当たって、まず初めに第2次世界大戦後現在までの日本における反戦平和の取り組みの概観を、国際情勢も挟みながら6期に分けてご紹介したい。

第一期は敗戦から「第五福竜丸事件」（1954年・後述）をきっかけに原水爆禁止運動が高揚する前の53年まで。第2次世界大戦が終わり、国際的には米ソ冷戦体制が始まるとともに、「核戦争の危機」と常に向き合わざるを得ない時代が始まった時期である。

この時期はまた、大戦が終結したことによって発生した「地域紛争・内戦」の時代の幕開けともいえ、のちのベトナム戦争につながるインドシナ戦争（46～54年・ベトナム独立戦争）や、第1次中東戦争（48～49年）、朝鮮戦争（50～53年）などが勃発した。とりわけ朝鮮戦争は日本とも関係が深く、この戦争を契機に50年には、現在の自衛隊につながる「警察予備隊」が発足

したことはよく知られている。

国内的には、占領統治下から独立講和条約締結に向けた戦後復興の時期であり、講和をめぐる「全面講和」か「単独（片面）講和」か（注1）の議論が闘わされた。当時『世界』編集長だった吉野源三郎が呼びかけた「平和問題討議会」（のちに「平和問題談話会」と改称）は講和問題を軸にした平和論の探求と提言を行ったが、その中で世界に先駆けて「米ソ平和共存」論を打ち出し、当時の世論に大きな影響を与えた。

談話会は当初、「全面講和・中立不可侵・国連加盟・軍事基地反対・経済的自立」を掲げたが、その後「全面講和・非武装・中立」論を打ち出し、51年に社会党・総評（注2）が打ち出した「全面講和・非武装・中立・軍事基地反対」という「平和4原則」につながった。

また、世界平和評議会（49年結成）（注3）主催で50年に開催された第2回平和擁護世界大会で呼びかけられた「原

子兵器の絶対禁止」を掲げる署名運動（ストックホルム・アピール）が各国で取り生まれ、わずか8カ月という短期間に5億余の署名が集められた（日本では645万）。

その他、賀川豊彦（注4）や下中弥三郎（注5）などの提唱による世界連邦建設同盟の結成（48年）や、戦没学生記念会（わだつみ会・50年結成）による取り組みなどがあった。

前者の取り組みについて言えば、当初は右から左までかなり広範な勢力を結集して「軍備の全廃を目標として各国の現有軍備を徹底的に縮小する」などの目標を掲げていたが、理念的なキャンペーン活動の枠を超えることができず、左派勢力の離反もあって60年安保（後述）を境に衰退していった。

わだつみ会については、会結成の基になった戦没学生の手記『きけわだつみのこえ』（49年）が大評判となり、高校生、大学生を中心に「平和運動のバイブル」とも呼ばれたが、党派的な対立や世代間の対立、また財政的事情等もあって解散（58年）、再建（59年）、指導部の交代等が繰り返され、現在に至っている。

第二期は、1期終了の翌年から「ベ

平連（ベトナムに平和を！市民連合）」が結成され、ベトナム反戦運動が高揚する直前の64年まで。原水爆禁止運動と60年安保闘争に代表される反戦平和運動の時代である。

54年に、静岡県焼津のマグロはえ縄漁船第五福竜丸が、南太平洋上ビキニ環礁で行われたアメリカの水爆実験によって被曝した事件を契機に、東京・杉並区の主婦たちが始めた原水爆禁止運動（当初の名称は「水爆禁止署名運動」）は瞬く間に全国運動へと発展し、杉並での運動スタートから3カ月後の8月には原水爆禁止署名運動全国協議会（原水協）が結成された。

原水爆禁止運動は当初、当時の反戦平和運動の重要課題であるものの意見の対立があった再軍備や基地問題などには触れず、「原水爆禁止」一本に絞った運動とすることで町内会などを含む「国民的」運動として出発し、戦後の反戦平和運動に大きな存在感を示した。しかし、次第に党派対立が持ち込まれ、ついには組織分裂（62年）に至って今日を迎えている。

また、この時期の半ば（60年）には、51年に締結された日米安全保障条約の改定・延長をめぐって広範な反対運動が1年余りにわたって続けられた。い

わゆる「60年安保」である。

改定を主導した当時の首相・岸信介が太平洋戦争開戦時の商工大臣で、戦後はA級戦犯に指定された人物であることに加え、条約改定案には「日本を戦争に巻き込む」危険性のある条項(注6)があったため、国民各層から「改定反対」「延長反対」の運動が巻き起こった。

改定期限の1年前から運動が続けられたが、60年5月19日の衆議院本会議での強行採決を受けて、岸の政治手法に対する反発から「民主主義を守れ」の声が広がり、以後1カ月にはわたって10万人を超える市民・学生・労働組合員らが国会を取り囲むという空前絶後の運動となった。その結果、条約は成立したものの岸内閣は総辞職を余儀な

くされ、政権がもくろんでいた憲法改定の動きは封印されることになったと言われている。

一方、この時期には「内灘」^{うちなだ}「砂川」^{すながわ}「北富士」(注7)「沖繩」^{おきなわ}などの基地被害告発、反基地闘争が高揚したが、反基地闘争は、第3期の相模原戦車輸送阻止闘争(注8)などに引き継がれていく(5ページ参照)。

* * *

第3期は、ベ平連結成(65年)からベトナム戦争が終結する75年まで。ベトナム反戦運動と70年安保の時代であり、それまでの社会党・共産党などの革新政党や労働組合など「組織主体」の運動に対して、「無党派市民」が新たな運動の担い手として登場する。ベ平連の特徴として多くの人が挙げるの

が「個人原理」と「加害者意識」である。

個人原理というのは、個々の参加者の自発性と自己責任を基本においたもので、そこから「言いだしっぺがやる」「代行主義の否定」「誰もが誰にも命令を出さない」といった行動原則が生み出された。これは、それまでの革新政党や労働組合の「組織主体の運動」と真逆の行動原理であり、日本の反戦平和運動に新しいスタイルを持ち込んだと評される。

また「加害者意識」というのは、1期、2期の運動がどちらかと言えば、「もう戦争はこりごりだ」「他国の戦争に巻き込まれたくない」といった「被害者意識」を基調としていたように思われるのに対し、民族独立を求めて闘っているベトナムの民衆に対して「加害

者ではいたくない」との意識である。この意識の背景には、当時日本は、派兵こそしなかったもののアメリカ軍の後方基地としてこの戦争に加担し、加害者の側に身を置いていたということがあった。

加えてベ平連の活動は、アメリカの反戦市民運動との連携や、JATEC(反戦脱走米兵援助日本技術委員会)を通じての脱走兵支援の取り組みなど、国の枠を超えた国際的広がりをつくり出したことも特徴の一つとして挙げられる。

この時期の反戦平和運動のもう一つの柱であった70年安保闘争は、60年の改定以来10年を経過して、規定(条約第10条)に基づいて条約の終結を選択するか、自動延長を選択するかが争点

(注1) 第2次世界大戦の講和に当たって、「旧敵対国の全てと講和すべき」とする全面講和論と、「合意が得やすい国(主として西側諸国)との条約締結を優先すべき」とする「単独(片面)講和」論とが対立したが、ソ連・東欧諸国との関係上「日本を西側陣営の一員としてできるかぎり早く独立させたい」とのアメリカの意向により、中国やソ連、インド等を除いた「単独(片面)講和」となった。

(注2) 日本労働組合総評議会の略。1950年から89年まで、日本の労働運動のナショナルセンターとして大きな力を発揮。「社会党・総評ブロック」を形成した。

(注3) 1949年4月に開催された「平和擁護世界大会」を契機に同年11月に結成された国際的平和運動組織。キュリー夫妻の娘婿であるジョリオ・キュリーが初代会長を務めるなど当初は幅広い層の人びとに支持されたが、次第にソ連の影響力が強まったことで中間層の離反を招いた。

(注4) 牧師で、大正から昭和戦後期までのキリスト教社会運動家。その活動領域は労働運動、農民運動、協同組合運動等幅広く、現存するもっとも古い生活協同組合であるコープこうべの前身である神戸購買組合と灘購買組合設立者でもある。

(注5) 百科事典で知られる平凡社創立者としてよく知られているが、日本初の教員組合である啓明会設立者でもある。また教育の世紀社を結成し、児童の村小学校を設立。

(注6) 条約第5条には「日本の施政権下にある領域でいづれかが攻撃された場合は共同防衛する」、6条には「極東における国際的平和および安全に寄与するため、アメリカ軍には日本国内の施設・区域の使用が許される」との取り決めが記されている(引用の条文は原文を簡略化している)。

(注7) 内灘は石川県中西部に位置する村(町)。1952年に在日アメリカ軍の砲弾試験場提供をめぐって日本初の基地闘争が闘われた。砂川は、55年にアメリカ軍立川基地拡張をめぐって反対運動が起こった東京都北多摩郡の町(現在は立川市)。北富士は、山梨県富士吉田市と山中湖村にまたがる旧日本陸軍(現・陸上自衛隊)の演習場の名称。第2次世界大戦後の一時期はアメリカ軍に接収され、返還後も協定によりアメリカ軍の利用が継続された等ことから反基地の闘いが長らく続けられた。

(注8) 1972年に起こった米軍戦車輸送阻止の闘い。ベトナム戦争で破損した戦車を相模原総合補給廠(はぎゅうしょう)で修理した後再び戦地で使用するための輸送業務を阻止すべく、積み出し基地である米軍港灣施設である横浜ノース・ドック手前の村雨橋で市民の座り込みが行われ、それを受けた横浜市と相模原市が「戦車輸送は村雨橋の重量制限を超える」との理由により輸送を100日間禁止した。

Vol. 137 「デイジー図書」って？

うおろ君の
気にな〜る
セミナー



まんが ■ ラッキー植松



視覚障害を含め、さまざまな事情で「見えない・見えにくい」状態になると本が読めなくなる。その時に助けとなるのがデイジー図書（デイジーは Digital Accessible Information System の略）で、情報を受け取る利用者にとって貴重な情報源となっている。

デイジー図書は視覚情報を音に訳した資料である。音訳とは、視覚情報を取得することが困難な人に音で情報を提供する手法であり、小説や実用書、地域の広報紙など幅広い発行物が音訳されている。デイジー図書の音は人の声と機械の音（合成音声）があり、最近では合成音声が増えてきている。

筆者が勤務する視覚・聴覚障害者センターではデイジー図書製作の大半をボランティアが支えており、ボランティアの養成も行っている。

一部のボランティアは「今後は人の声が必要なくなるのでは……」と哀愁モードを漂わせるが、私が聞く限り、見えない・見えにくい人からは、人の声で情報を届けてほしいという希望が圧倒的である。一方で合成音声は完成までの時間が早いこともあり、利用を希望する人も微増傾向にある。

今後は、利用者が状況に応じて好みの音（人の声か合成音声か等）を受け取れるよう、さまざまな種類の音訳情報を選択できる未来を目指していきたい。

堺市立健康福祉プラザ 視覚・聴覚障害者センター 荒木穂

ウォロ・バインダー、
いかがでしょうか？

ウォロ2年分(12冊)を
挟み込めるバインダー
(1冊500円+送料350円)です。
お問い合わせはウォロ編集部/office@osakavol.orgまで

右上、ジャパンヴィーガンアワード市場革新賞。左上、スタッフと。下、3周年記念イベント 提供 (全て) =ブイック



U35の Social Good

第44回

これからの社会を担う35歳以下の社会起業家。素直な思いと自由な発想は、どんな商品・サービスを生んだのか。若き起業家たちの「物語」には、きっとあなたにも伝わる「熱さ」があります。

ヴィーガン生活を 支えるサービス

株式会社ブイック

代表取締役 CEO 工藤 柗さん

神戸市中央区磯上通 4 丁目 1-14 三宮スカイビル 7F

設立：2020 年 4 月 スタッフ数：7 人

誰もがヴィーガンを選択できる社会をつくるために、ヴィーガン生活を支えるサービスを展開している。ヴィーガン商品専門「ブイックスーパー」やレンジですぐに食べられるヴィーガン冷凍弁当の定期便「ブイックデリ」、ヴィーガンレシピ投稿サイト「ブイック」などがある。

誰もがヴィーガンを選択できる社会をつくりたい

高校3年生でヴィーガンに

環境問題や教育、貧困など社会課題に関心が高く、コンビニでアルバイトをしていた高校時代、レジ袋有料化の前から「レジ袋いりますか」とお客さんに尋ねていた工藤さん。高校3年秋の下校時、車に何度も轢かれた猫を見て「ひどい」と感じたことが人生の転機になった。帰宅して野良猫のことなどを調べて、保健所での犬・猫の殺処分の話を知ることとなった。さらに桁違いに家畜が屠殺されていることも知り「こっちの方がひどいな」と感じた。自分の「食べる」行動によって、そのような問題が起こっていることに気づき、次の日からヴィーガンを始めた。当初は大変だった。何を食べたらいいいのか分からないからだ。数週間は、おにぎりや豆腐、野菜の水炊きばかりを口にしていた。その後、YouTubeやブログなどでレシピを見つけ、数カ月の間に食べられるものが分かるようになった。ただ情報が散在している、一つの料理を作ろうと思ってもAさんのYouTube、Bさんのブログ……といったようにいくつもの情報を参照しなければならず大変だった。

当事者同士が連携する

神戸大学に進学すると、大学食堂にヴィーガンメニューを導入する活動を始めた。

自分の経験から、ヴィーガンを続けるハードルの高さを何とかしたかったが、共感や成果を得ることが難しかった。誰かに理解を求めてもうまくいかないのなら、当事者同士で連携し、活動した方が状況を変えられるのではないかと思いついた。出会ったのが協同組合のモデルだった。ヴィーガン当事者が協力してお金を出し合い、組織を運営し、互いに利用し合うサービスを作りたいと考えた。しかし、協同組合では物理的なエリアが限定される。全国的な活動展開を計画していた工藤さんたちは最終的にはNPO法人を選び、日本ヴィーガンコミュニティを2018年に立ち上げた。

ヴィーガンを始めたい人が簡単に行動できる環境を

NPO法人の立ち上げ前、日本中のたくさんの方々のヴィーガンの実践者と出会った工藤さん。話をして共感してくれた人たちがNPO法人の理事や正会

員となっている。「僕たちはヴィーガンをやりたいと思った人が簡単に行動できる環境をつくりたいと考えています。やろうと思えば簡単に続けられるようにならないと、ヴィーガンやベジタリアンは増えません。結果的に動物の屠殺量の減少や環境問題の解決につながらなくなります」

NPO法人から株式会社へ

みんなの意思で事業を決めていくことを大事にしたいとNPO法人を立ち上げた工藤さん。「でも理想通りにはいなくて。お金もそうですし、スタッフ全員が副業として空いた時間だけ関わっていても前進しません。思い返せばNPOでお金を集める方法はいくらでもあったのですが、当時、僕は大学生。高額な寄付者の知り合いもいなかったし、助成金の申請方法も分かりませんでした」。そこでスタートアップ企業として投資家から資金調達し、本業として関わるができる状態を作ろうと20年、事業を株式会社に移行した。「僕としてはNPOで売り上げを出し、運営するのはカッコいいなと思っているの、いつかリベンジしたいです」

ユーザーからスタッフに

ヴィーガン商品専門「ブイッククスーパー」やレンジですぐに食べられるヴィーガン冷凍弁当の定期便「ブイッククデリ」、ヴィーガンレシピ投稿サイト「ブイックク」など、ヴィーガン生活を支えるサービスを展開する株式会社ブイックク。現在のスタッフは7人。フルタイムが3人、業務委託や副業として4人。ほとんどはSNSでの求人がきっかけで入社し、その多くはブイッククのサービスのユーザーだった人だ。会社のミッションに共感し一緒に取り組みたい、と応募する。だから事業内容をすでに理解しており、スムーズに仕事を始められる。「ユーザーは利用者というだけでなく、同じ目的をもっている仲間だと思っています」と工藤さん。基本的に事業の基盤づくりはこの7人で取り組み、レシピ開発やデザインなど専門性が必要な場合は、専門家にアドバイスをもらう。

当事者との距離が近いのが特徴

最近、ヴィーガンに注目する日本企

業も増えてきた。「ヴィーガンの当事者に一番近い場所にいるので、商品開発に意見がほしいと協力依頼をいただくこともあり」と工藤さん。ブイッククでは、ヴィーガン当事者とのコミュニケーションを大切にしている。

例えば、レシピ投稿者にお礼の連絡をすると、工藤さんのSNSにレシピ投稿者がコメントをするようになり、交流が生まれる。そこで「大阪でヴィーガン商品のポップアップショップをするので協力してくれませんか」「Webページを作るときにフィードバックをもらえませんか」など、無理のない範囲での協力依頼を意図的にやっているそうだ。SNSを、発信だけでなく双方向でのコミュニケーションに活用しているのも特徴的である。

Hello Veganiな社会を つくる

ブイッククのミッションは「Hello Veganiな社会をつくる」。高校のときから社会課題に関心の高かった工藤さんだが、とりわけヴィーガンが暮らしやすい社会づくりに力を入れているように見える。それはなぜなのか。

「近くにヴィーガンが利用できる

スーパーやレストランがなければ、関連する社会課題を知ってもアクションができません。順番としては、まずヴィーガンを選択できる状況をつくる。その後にヴィーガンを選ぶ背景にある社会課題を発信するという順番が、個人的には有効だと考えています。選べない状態のまま課題だけ発信すると、ヴィーガンの人々が大変な思いをすることになる。続けたくても続けられません」。

編集委員 久保友美

工藤 柁さん

1999年生まれ、大阪府出身。高校3年生から動物倫理と環境問題を理由にヴィーガン生活を開始。神戸大学食堂へ対応メニュー導入。ヴィーガンカフェ店長を経て、2018年にNPO法人日本ヴィーガンコミュニティを立ち上げる。その後、20年4月に株式会社ブイッククを創業。



仲町の家

東 京都足立区、北千住駅きたちぢまから10分ほど商店街を歩き、石敷きの細い路地を進むと、美しい庭の中に伝統的な日本家屋がある。アートプロジェクト「アートアクセスあだち音まち千住の縁えん」(以下、音まち)が運営する文化サロン「仲町の家なかつちやう」だ。2018年にオープンし、5人のコンシェルジュが交代で常駐している。

建物の所有者は千住のまちをつくった一人、石出掃部吉胤いしでかものすけの子孫。建物の魅力が伝わるように使ってもらいたいという思いを託され、音まちが運営している。アートを前面に出すと、関心がない人にとって入りにくく感じられたり、自分とは関係ない場所と思われるりしてしまうため、人と人の縁をつくりたいという思いから、文化サロンとしている。

利用者は近隣住民のほか、文化芸術活動に携わる人、東京藝術大学の学生なども訪れ、ギターを弾いたり、庭を見てのんびりしたり、おしゃべりをしたり、散歩のついでに立ち寄りたり、思い思いの時間を過ごす。

仲町の家では音まちが主催する事業のほかに、年間を通じてさまざまなパイロットプログラムを実施している。パイロットプログラムとは、仲町の家という場で何かやってみたいという人とともにこの場所の可能性を拓くプログラムで、それらをコンシェルジュと話していく中で実現していく。東京藝術大学油画専攻の学生による作品の企画展、映画のトークイベントなどが開かれ、幅広い年齢層の参加者がある。この場で出会ったアーティスト同士でプログラムを企画、実施したり、ギターバンドを結成したりと新たな出会いも生まれている。小冊子をみんなで作るプログラムはルーツが異なる留学生たちが催し、子どもから高齢者までが参加。多様な交流の場になったという。

「100年先にも地域のの人に愛されるようにこの建物をつないでいきたい」とディレクターの吉田武司さんは話す。

編集委員 山中大輔

ホームページ



Instagram



Facebook



仲町の家

東京都足立区千住仲町29-1
オープン
土日月祝10:00~17:00
年末年始・夏季休業あり



左からコンシェルジュ小泉さん・山本さん・佐藤さん、ディレクター吉田さん



三淵嘉子の生涯 人生を羽ばたいた「トラママ」

佐賀千恵美 著
内外出版社、2024年3月
1430円(税込)

本書は2024年春スタートのNHK連続テレビ小説「虎に翼」のヒロインのモデルになった三淵嘉子の生涯を描いている。

嘉子は女性が学校卒業後、結婚して良妻賢母となることを当然視された時代に大学で法律を学び、1940年、日本初の女性弁護士になった。その後、実家で書生暮らしをしていた男性と結婚。男子が誕生し、つかの間家族で暮らしたが、夫は招集されて戦地に赴き、嘉子も幼子とともに疎開を余儀なくされる。

戦後、夫と父母が病死。幼い息子や弟を養うためにも復職を考え、まだ女性に応募資

格がなかったにもかかわらず「裁判官採用願い」を提出したが、裁判官でなく司法省民事部に採用された。女性は婚姻によって無能力者となり、重要な法律行為は夫の同意を必要とするなど「家」制度が考え方の柱にあった旧民法の改正作業に従事。それまでは別々だった「家事審判所」と「少年審判所」を統合した家庭裁判所の誕生にも関与することになり、嘉子のその後のキャリアに多大な影響を与えることになる。

嘉子の女性が男性と対等に仕事することへの気概を感じさせるエピソードを紹介する。

2代目最高裁長官の田中耕

太郎氏が「女性の裁判官は本来の特性から見て、家庭裁判所の裁判官がふさわしい」と発言した際に「適性は個人の特性によって決まる」とその場で反論したという。

また、初めて女性裁判官を受け入れる側は、いたわりのつもりか殺人事件や強姦事件等を女性に担当させることをはばかりの向きがあったが、この「特別扱い」がかえって女性の活躍をはばんでいると指摘。女性の地位が男性と平等になったことで、権利行使の際は厳しい自覚と責任が伴うとし、男女双方に対して意識改革を訴えている。

編集委員 阿部 太極

～市民視点の映画を紹介する～

©1978 RAI-ITALNOLEGGIO CINEMATOGRAFICO - ISTITUTO LUCE Roma Italy

今月の作品 『木靴の樹』



監督・脚本・撮影・編集：エルマンノ・オルミ
音楽：ヨハン・セバスティアン・バッハ
出演：ルイジ・オルナーギ、フランチェスカ・モリッジ
1978年 | イタリア | 187分 |
ブルーレイ販売中 定価 6380円
(販売元：紀伊國屋書店 / 発売元：シネマクガフィン)

これまで見てきた映画の中で、僕が選ぶベストワンは本作だ。
初めて見たのは、僕が中学生のころだったと思う。深夜にテレビをつけたら偶然映っていた。途中から見たので映画のタイトルも内容もよく分かっていなかった。セリフもあまりなく、映し出される農家の暮らしをただぼーっと眺めていた。強く印象に残ったのは子どもが木の靴を履いて学校に通う姿であり、父親が木靴を作る姿だった。

そのあと、あの映画をもう一度見たいと思うもタイトルが分からない。20年ほど前、偶然レンタルビデオ屋で発見した時は、運命の再会を喜び、興奮した。改めて見ると、1978年に制作されたイタリア映画だった。しかも時間は187分！（当時僕がテレビで見

たのは後半ラストの部分だった。19世紀末、イタリア・ロンバルディア州に暮らす4軒の小作農の家族の物語。暮らす家の建物や、耕す大地、家畜のほとんどが地主の所有であり、収穫の3分の2が地主のものとなる。ある女性は、子どもたちや義父を残したまま夫に先立たれ、洗濯で生計を立てる。口減らしのために幼い娘を売ることを息子に相談すると、まだ少年の息子は拒み、働きの口を探し始める。そして義父は幼い孫の面倒を見ながら、少しでも早く作物を収穫しようとして工夫を凝らす。またある家族は、神父の勧めで長男を小学校に通わせる。学校まで片道4キロの道のりを木靴で通う息子。それを心配そうに見守る両親。そんな日々の中で息子の木靴が割れてしまうのだが……。彼らの貧しく慎ましい日々の暮らしを、監督

●今月の館主

いまいともき
今井 友樹

1979年岐阜県生まれ。日本映画学校(現・日本映画大学)卒業後、日本各地の基層文化を映像で記録・研究する民族文化映像研究所に入所。所長の姫田忠義に師事し、映像制作に関わる。現在、株式会社工房ギャレットの代表を務める。



イラスト：杉浦 健

であるエルマンノ・オルミが果たしたかな視線で美しく描いている映画であった。
うまく言葉にできないながらも、全編を見たことで、改めてこの映画の印象が強くなった。さらに出演者は皆、俳優などではなく、地元の農民なのだ。故郷の先祖たちの暮らしを当時の住民が再現しているところに、僕は強い印象を残すリアリズムを感じたのかもしれない。見なおすたびにあらたな発見がある。

私の市民活動 Library 第63回



加害者家族バッシング 世間学から考える

佐藤直樹 著
現代書館、2020年4月
1980円(税込)

清潔である、落とし物が戻る、治安がよい等々、最近日本について高い評価を聞くことが多いのだが、理由として日本人は高潔だから、名誉を重んじるから、他人への敬意があるから、などと聞くたびに、私は何か違和感を感じていた。

本書は「世間学」の観点から「お返し」「身分制」「近代家族」「ケガレ」「死刑制度」「土下座」「自殺率」「親子心中」などをキーワードに、被害者家族バッシングの実態、日本の「同調圧力」による「世間」の息苦しさ、生きづらさについて探っていく。

著者は、日本には独立した「個人」も、個人の集まりで

ある「社会」も存在せず、日本人が集団になった時に発生する力＝「世間」があるのだという。

また、日本では「人に迷惑をかけてはならない」という「世間のルール」が、法律より優先されるという。

さらには、加害者、特に殺人などの重罪犯の家族は、「世間」という名の周囲の人間や赤の他人から犯罪者と同義の烙印を押される。非難、罵倒する大量の匿名の手紙が舞い込み、退職、転校や引っ越しを余儀なくされ、ときには自殺にまで追い詰められる、という多くの事例が示される。

かたや欧米では、たとえば1998年の米アーカンソー

州の中学校での銃乱射事件。この加害者である生徒の家族にも大量の手紙が送られて来たが、なんとそのすべてが励ましであったという。欧米では加害者家族支援の民間組織も多いそうだ。しかし日本にこそ多くの加害者家族支援が必要ではないだろうか。

世間による「同調圧力」によって、意識的にしろ無意識的にしろ、社会貢献や他者貢献などへ動機付けられる場合も多いと思う。しかし、それを単純に歓迎してもよいだろうか。それぞれの心の外側や内側にある「世間」を認識しておくべきではないかと思う。

編集委員 華房 ひろ子